

特集

音楽劇

『ガラスの仮面』
その魅力に迫る



【NINAGAWA 千石目】

※ながらし

歌舞伎俳優

市川亀治郎 × 蜷川幸雄

(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

INDEX

Saitama Arts Theater Press NO.15 May.-June.



03 ESSAY

『身毒丸』復活 石井辰彦

人類史の闇で抱き合う永遠の母と息子!



04 TOPIC

音楽劇 『ガラスの仮面』

その魅力に迫る
5000万部の国民的コミックに 2330人の応募!



08 TALK

公開対談 NINAGAWA 千の目 第13回 市川亀治郎× 蜷川幸雄

稽古初日に台詞を覚えてこないでくれ!



10 PLAY

さいたまゴールド・シアター 第2回公演 『95kgと97kgのあいだ』

蜷川幸雄インタビュー

大稽古場を80人の出演者が埋め尽くす!



12 DANCE

ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス『Amjad アムジャッド』

エドゥアール・ロック

男女ともにトゥシューズをつけて踊る!



14 DANCE

『Here to Here』 勅使川原三郎

世界17都市を巡った名作が
彩の国に!



16 MUSIC

N響公演 指揮者・井上道義 インタビュー

マエストロ井上のマジックが起こる!



18 MUSIC

ベルリン・フィル ハーモニー 木管五重奏団

カラヤンと活躍してきた強者たちの一夜!



19 MUSIC

児玉 桃 メシアン・プロジェクト2008 第1回 児玉 桃、 野平多美、茂木健一郎

メシアンの魅力を召し上げ!

20 EVENT SCHEDULE & TICKET INFORMATION

イベント・カレンダー 2008.5.15-7.31
前売りチケット発売情報(～7.15) 発売中公演情報

23 THEATER BRIDGE

公演レビュー、募集など劇場からのご案内

24 Artist Diary 指揮者・飯森範親

『満開の桜に思うこと』

桜の花の千年の命を思いながら!

表紙 ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス 『Amjad アムジャッド』
PHOTO:Édouard Lock ILLUSTRATION:吉良麻実 (取材・文 高野麻衣)
編集:横山雅美 デザイン:ATAMATOTE International INDEX コピー: BASON
©(財)埼玉芸術文化振興財団
Published on 15.MAY 2008 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation



『身毒丸』復活 石井辰彦

3月11日公演より

愛憎相半ばする実母との哀しくも過酷な関係を言われる寺山修司は、ついに「家」を持たなかった。家の中心点である母への複雑な感情を綴った作品を多く発表したのは、その反動でもあるのだろうか。

『身毒丸』は、そんな寺山修司の特色が飛び抜けて顕著な秀作だ。しかし、東北出身であることを強く打ち出していたこの劇詩人らしい濃密な土俗的色彩が、普遍的な名作と呼ぶことをためらわせる。仏壇とか鏡台とかいった微臭い小道具に飾られた物語が、「寺山修司の世界」の中で小さく完結しているように感じられてならないのである。

この内面的な作品を、蜷川幸雄は広大な演劇的宇宙に解き放つてみせた。寺山修司らしい土俗的色彩は排除されていないのに、蜷川幸雄版『身毒丸』、殊に今回さらに磨き上げられた『身毒丸』復活は、大袈裟ではなく世界規模の普遍性を獲得していたのである。

演出家はひっきりなしに装置を動かす。彩の国さいたま芸術劇場の広い舞台を滑るように動く装置は、移ろいやすい現世を象徴しているかのようだ。堅固な造りの「家」の装置が分割されてはまた結合する様子など、家というものの脆さを見事に視覚化し得ている。

そのようにして舞台上に現出した流転してやまない世界の中で、継母に扮する白石加代子の爛熟した演技と継子を演ずる藤原竜也の鋭利な肉体とが対峙する。ここでの母と息子の関係は、近親相姦の禁断の垣根を超えようとする危ういものだ。ちまちまとした土俗的空間に置けばそれはおぞましいだけだろうが、流転する広大な世界の中心に投げ込まれて、ふたりの俳優が魂まで燃え尽きそうな熱演を披露したこともあり、悲劇的な崇高さを強く帯びることになったのである。

かくして蜷川幸雄版『身毒丸』は、あの『オイディプス王』にも繋がる、真に普遍的な悲劇となった。劇場の特徴である深い舞台の奥の奥から客席に向かって押し寄せる「人類史の闇」とも呼ぶべきものの中で、激しく抱き合う白石加代子と藤原竜也は、永遠の「母と息子」を体現していたのである。

しいたつひこ 1952年横浜生まれ。歌人。短歌という古典的詩型を自在に活用しながら、外国語を含む引用や句読点、記号類の多用、文語と口語の混在、連作としての構造の重視など、日本語の統括法を半ば逸脱した作風を特徴とする。歌集に『七瀬』『バスハウス』『海の空』『全人類が老いた夜』『蛇の舌』。評論集に『現代詩としての短歌』など。演劇やオペラなどの舞台芸術にインスパイアされた作品も多い。

〔作〕寺山修司／岸田理生〔演出〕蜷川幸雄
〔出演〕藤原竜也 白石加代子ほか
3月7日(金)～4月10日(木) 全41公演

©Shunichi Takashima

演劇界この夏一番の話題 蜷川幸雄演出での舞台化へ
彩の国ファミリーシアター

音楽劇『ガラスの仮面』 詳細決まる!

世代を超えたファンを持つ、あの演劇コミックの名作『ガラスの仮面』が音楽劇になる!!
幻の名作『紅天女』の主演をめぐり、北島マヤとそのライバル・姫川亜弓が繰り広げる演劇の世界を描いた作品は、発行総数5000万部を誇る国民的コミック。それを蜷川幸雄が、オーディションで選んだ運命の少女2人と音楽劇にするという大きな話題が舞い込んだ。



桜小路 優
さくらこうじ ゆう

姫川亜弓も所属する劇団オンディーヌの若手の実力派俳優。マヤのデビュー当時からマヤを励まし、精神的に支える好青年。秘かにマヤに想いを寄せていたが、マヤの女優としての成長ぶりを心から支援し、演劇の理解者として見守り続ける。後に『紅天女』のための試演では、マヤの相手役を演じる。



北島マヤ
きたじま まや
大和田美帆

中学生まで一見普通の平凡な少女にすぎなかったが、往年の大女優・月影千草に見いだされ、演劇と出会い天才的な才能を示す。劇団の奨学生になるチャンスを掴み、女手ひとつで育ててくれた母親の反対も押し切って女優の道を歩んでいる。何よりも芝居が好きという強い情熱を持ち、姫川亜弓とともに、月影千草のもと『紅天女』の主演を目指す。



月影千草
つきかげ ちぐさ

『紅天女』の上演権を持ち、それを演じることの出来る唯一の往年の大女優。一線を退いているが劇団つきかけを立ち上げ若手俳優を育成しており、演劇に関しては決して妥協を許さない。『紅天女』の主演女優を自らの手で育てようとマヤの才能を一目で見抜き、厳しい稽古をつけて育てている。また姫川亜弓も『紅天女』の候補の一人として認め、マヤと競わせる。



姫川亜弓
ひめかわ あゆみ
奥村佳恵

有名映画監督と大女優・姫川歌子の間に生まれ、子役の頃からその天才的な演技力と美貌で名声を欲しいままにしてきた、演劇界のサラブレッド。マヤの演技の才能には早くから気づき、女優として自分の唯一のライバルとして認め競い合っている。もう一人の『紅天女』の主演候補として月影千草に認められた若手随一の女優。



速水真澄
はやみ ますみ

大手芸能プロダクション・大都芸能の若社長。父・速水英介同様、『紅天女』を自らの手で上演することに執念を燃やしている。周囲からは冷血で、仕事の鬼と思われているが、マヤの演技と出会い、そのひたむきさや純粋さに次第に惹かれる。そして匿名のファンとなり、舞台の度に紫のバラを贈る「紫のバラの人」としてマヤを応援していく。



原作者・美内すずえ先生から届いた 音楽劇『ガラスの仮面』へのメッセージ

取材・文 = 徳永京子 (演劇ライター)

『ガラスの仮面』はとても長く描き続けていますから(連載開始は76年)、登場人物ひとりひとりが、私にとって親戚のような存在です。昔からお互いによく知っていて、実家に帰ると会える、みたいな関係ですね(笑い)。

ですから私は、マヤや亜弓たちを生み出した原作者でもあり、同時に彼女たちを独立した存在とを感じる読者代表でもあると、自分で思っているんです。『ガラスの仮面』はこれまでも何度か舞台化、ドラマ化されてきましたが、企画としていただいたお話は何倍にも上ります。その中から、原作者として読者代表として、キャスティングなど期待できるポイントがあると感じた時、実際に進行していただきます。

蜷川さんが演出する、 “生きる情熱”がテーマの舞台に期待

今回の彩の国さいたま芸術劇場での舞台化は、蜷川幸雄さんが演出してくださるということ、そして音楽劇であるということに、まず心が動かされました。蜷川さんの舞台は以前から大ファンでしたし、音楽劇という形は、これまでの舞台やドラマとはまた違う、新たな展開が見られると思ったんです。テーマさえ損なわなければ、原作とは違う形の『ガラスの仮面』があっても構いません。むしろ早く観てみたいと、楽しみにしているんですよ。

『ガラスの仮面』のテーマは“生きる情熱”です。目の前に壁が立ちました。それをどう突き破るか。マヤは、回り道をしたりよじ登ったりせず、正面から壁を突き破るタイプ。彼女がそういう姿勢で困難を乗り越えるたびに、読者の方から「勇気をもらった」というお手紙をいただいていたので、そこは大切にしていきたいと思っています。

また今回、マヤと亜弓をオーディションで選ぶという点もとてもおもしろいと感じました。どんな方が選ばれるのかという心配は、まったくありませんでした。その過程が『ガラスの仮面』的でしたし、選ばれたおふたりには、ぜひ頑張ってくださいと思います。

私も最終選考に審査員として参加させていただきましたが、会場に入った時、机の配置や天井の高さが自分が描いたオーディション会場とそっくりで驚きました。そして参加者の皆さんの緊張感や蜷川さんの熱気がとても刺激的でした。ひとりで紙の上にコツコツと絵を描く作業が続いていると、作品の立体化への興味が生まれますし、また、共同作業に憧れるようにもなります。それが今回、現実のものになります。稽古も拝見して、原作のために取材しようと考えているんです。そうしたことも含めて、今から公演がとても楽しみです。

美内すずえ
みうち すずえ

漫画家。大阪府出身。「山の月と子ダヌキ」と「別冊マーガレット」で金賞を受賞し、高校生漫画家としてデビュー。以降「13月の悲劇」「はるかなる風と光」「妖鬼紀伝」等、次々に意欲作を発表し、人気漫画家となる。「ガラスの仮面」は1976年の連載当初よりベストセラーとなり、少女漫画史上、空前のロングセラー作品として読者から絶大な支持を受けている。過去に舞台化、テレビドラマ化、アニメーション化されている。音楽劇としての上演は今回が初めてとなる。

マヤと亜弓 ~運命の二人の少女への軌跡~ オーディション本選会レポート

“14人の本選会”へ——。昨年9月オーディション告知には、海外からの応募も含め2330人もの少女たちが名乗りを挙げた。予選を経て、明けて1月の終わりに開催された最終オーディションで彼女たちに課されたのは、自由曲歌唱とあの“ジュリエット”のバルコニーシーンを演じるというものだった。

取材・文=徳永京子(演劇ライター)

大きな話題と注目を集めたふたりのヒロインのオーディションは、原作の美内すずえさん、脚本の青木豪さんらも立会い、演出の蜷川幸雄さんによる最終審査で1月31日、遂に結論が下された。選ばれたのは、北島マヤ役に大和田美帆さん。すでに何本も舞台を踏み、ミュージカルに出演経験のある、明るい笑顔の24歳だ。そして姫川亜弓役には奥村佳恵さん。演劇経験はないが、クラシックバレエで培ったプロポーションとエキゾチックな顔立ちが目を引き18歳。どちらも、審査員全員の意見が一致した結論だった。

あの“ジュリエット”を演じきる

最終審査は彩の国さいたま芸術劇場の稽古場で行われた。そこに残った候補は14名。審査内容は歌と演技の2種類で、歌は自分で選んだ曲の歌唱(予選は課題曲)、演技はシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の有名なバルコニーシーンが指定された。予選はジュリエットの長いモノローグだったが、本選ではロミオ役の俳優が相手役を演じ、初々しくもエネルギーあふれる恋の会話を演じることに。稽古場の2階部分の通路をバルコニーに見立て、ジュリエットは上から、ロミオは下から、本当の舞台さながらの位置関係で愛の言葉を交わした。

その後、蜷川の「もっと近くで表情が観たい」という希望と指示で、急ぎよ、ジュリエットとロミオが平行に並び、同じシーンをもう1度演じることに。床にふたつの円を描いた蜷川は「予算や会場の都合によっては、バルコニーがつかない場合がある。そんな時は真っ暗な中に



床に描かれた円のバルコニーでの演技:奥村佳恵(姫川亜弓役)

ふたつのライトを当てて、ふたりのシーンをつくれればいい。この円がそのライトだよ」と。相手役と視線を交わさない分、演技手には一層の集中力が求められる。さらに「なんでそんな怖い顔するの?ジュリエットは幸せなんだよ」といった蜷川の演出もあって、会場の熱気は一気に上がったのだ。

“マヤと亜弓”、すでにそれはこの日から

最終審査に残った面々だけあって、歌も演技もそれぞれに個性があったが、人の演技を見ている様子にも、ひとりひとりの人間性が現れていて興味深かった。奥村さんは落ち着いた様子で背筋をまっすぐに伸ばして一点を見つめ、静かに集中力を高めている。一方の大和田さんは演技をしている候補者を食い入るように見つめて一緒にせりふを暗唱。その人がつまと自分のことのように悔しそうな表情になり、小さな声で(離れているので相手には聞こえない) 続きのせりふをつぶやく。対照的なふたりのその姿はまるで、もう『ガラスの仮面』の本番が始まっているような錯覚を感じさせた。素晴らしいコンビの誕生と言っていっただろう。

1. 書類選考

総数2330名応募。募集期間は2007年9月1日から21日間。

2. 面談(書類選考通過者)

面談進出者 557名。面談は2007年10月27日から計5回実施。

3. 予選

予選進出者 200名。予選は2007年12月24日から計14日間。

4. 本選

ファイナリスト 14名。本選は2008年1月31日に実施。

脚本家・青木豪さんの語る、『ガラスの仮面』の魅力

脚本を書く時、「マヤは『マイ・フェア・レディ』のイライザだ」と感じたんです。

『ガラスの仮面』の連載第1回を、僕はリアルタイムで読んでいます。わりと年の近い叔母が近所に住んでいて、僕が小学6年生だったかな、叔母の部屋に『花とゆめ』があった、それを読みました。

最初のページを今でも鮮やかに覚えています。何も知らないひとりの少女が、これからいろんなことを知って成長していく物語だということが、そこでもう伝わってくるようでした。もともと僕は少年マンガより少女マンガがおもしろいと感じる子供だったんですが(笑い)、やはり『ガラスの仮面』は、読めば読むほど特別な作品でした。大人になって読み返すと、設定がリアルなのでエピソードひとつひとつに説得力があり、読み手を引き込んでいく力がケタ違いだったとわかりますが、当時はただ夢中になって読んでいましたね。

今回の脚本は、当時の印象も大事にしつつ、「マヤは『マイ・フェア・レディ』のイライザである」という直感のもとに書き進めています。何も知らない野性児のようなマヤが、月影先生という導き手に出会って、一歩ずつ女優に近づいていく姿を伝えよう、と。歴史があり、ファンの方がとても多い作品ですからプレッシャーはありますが、これだけ『ガラスの仮

面』を好きな人間が書いているんだから、皆さんにそんなに怒られるような内容にはならないだろうと、自分で信じているところがあるんです。

ちなみに僕は小学5年生の時、自分の意志で蜷川さん演出の『ハムレット』を観て感銘を受けた人間です。ですから今回の脚本のお話は、ずーっと大好きなもののテンコ盛りで(笑い)、断るなんて考えられませんでした。

個人的に『ガラスの仮面』の登場人物で1番好きなのは、源造さんです。自分では表に出ないで月影先生たちをサポートする姿が、裏方である自分と少し重なるんですよ(笑い)。

青木豪 あおき ごと

劇作家・演出家。1997年、演劇ユニット「グリング」を旗揚げ。以後、全公演の作・演出を務める。近年は外部公演の作・演出も多く手掛け、次代を担う演劇者の一人として注目を集めている。主な作品に演劇集団「東風」、シス・カンパニー「僕のゆりかご」、新感線プロデュースのうえ歌舞伎☆號「IZO」(演出:いのうえひでのり)など。



『ガラスの仮面』の連載が始まった『花とゆめ』1976年新年第1号

Profile

北島マヤ

大和田美帆

おおだ みほ

東京都出身。1983年生まれ(24歳)。2003年『PURE LOVE』(小池修一郎:演出)ヒロイン役でデビュー。以後、舞台を中心にテレビ、CM等幅広く活躍。主な出演作として、舞台『ファンタスティックス』(宮本亜門:演出)、『恋愛戯曲』(鴻上尚史:作・演出)、『阿国』、『寝坊な豆腐屋』(栗山民也:演出)、『風林火山』(石川耕士:演出)、テレビドラマ『菜と紙魚子の怪奇事件簿』、『シンデレラになりたい』など。本年5月には『恐竜と隣人のボルカ』(後藤ひろひと作・演出)に出演が決まっている。



姫川亜弓

奥村佳恵

おくむら かい

大阪府出身。1989年生まれ(18歳)。6歳からクラシックバレエを学ぶ。今春、高校を卒業。今回の『ガラスの仮面』が初舞台となる。



PLAY

彩の国ファミリーシアター 音楽劇 ガラスの仮面

【日時】8月8日(金)~8月24日(日) 全22公演

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【原作】美内すずえ 【脚本】青木豪 【演出】蜷川幸雄

【出演】大和田美帆 奥村佳恵 (ほか)

【チケット(税込)】一般:S席6,000円/A席4,000円

メンバーズ:S席5,400円/A席3,600円

【発売日】一般:5月17日(土) ※メンバーズ優先予約終了。

曜日	8	9	10	11	12	13	14	15	16
曜日	17	18	19	20	21	22	23	24	
13:30	●	●	●	●	●	休	●	●	●
18:30	●	●	●	●	●	●	●	●	●
曜日	17	18	19	20	21	22	23	24	
曜日	日	月	火	水	木	金	土	日	
13:30	●	休	●	●	●	●	●	●	
18:30	●	●	●	●	●	●	●	●	



バルコニーシーンのジュリエットの演技:大和田美帆(北島マヤ役)



公開対談シリーズ第13回
NINAGAWA 千の目

ジーンズに濃紺のジャケットで現れた、歌舞伎役者・市川亀治郎さんは爽やかな、知性の漂う好青年そのもの。しかし芝居談義がはじまると、蜷川幸雄にぶつける演出家とは、プロデューサーとは、という質問に熱い真剣さがほとぼしる、そんな対談となった。

(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

歌舞伎俳優

蜷川幸雄 × 市川亀治郎

通常の女形がやってはいけないことのフルコースで

蜷川 (以下N) 市川亀治郎さんです。歌舞伎座でやった『NINAGAWA 十二夜』で御一緒したのですが、とても優秀なおかつ論理的な俳優さんですので、是非お話を聞かせていただきました。

市川 (以下I) こんにちは。今日はお招きいただき、ありがとうございます。

あの時は『NINAGAWA 十二夜』の上演が決まっても何も読まなかったし、結局何もわからないままで行きました(笑)。ただ僕の中では読み込んできて、自分の中で演技を全部組み立てると、演出家に一個ダメ出しを食らうと全部崩れてしまうことがあるので、それなら白紙で行って、演出家に言われる通りにしようと思っていたんです。そうしたら、蜷川さんが僕の麻阿役について一言「この女は物を食ったり、酒を飲んだり、本人がいなかったらそいつの悪口を言ってイヤらしい話に興じている人物だよ」と

話された。「あっ、解った」と思いました。それで、歌舞伎の女形がやってはいけないことを全部やろうと思ってやったんです(笑)。だからこれは歌舞伎の女形が絶対しないことを全部やったことによって出来た「新たな女形像」だったのです。例えば普段は立役より立ち位置は絶対下からなくては行けないが、立役より一歩前に出るとか、人が台詞を喋っている時は動いてはいけないのを全部動くとか。

N 知らない間に上手から下手へはいつくばり移動していたりね。

I だからいけないということをやったら本来の女形像が崩れるはずが、このシェイクスピア、特に蜷川さんが演出した『十二夜』がそれで成立して、新たな女形像が誕生したのは僕には驚きなのです。

N こんなうまい人がいるのだと驚きました。とても面白くて楽しかった。

I 役づくりで小物の研究に凝る方は凝ると思いますが、僕などはやはり着こなしですね。どうやったら色気が見えるかと。麻阿

全然笑いは不得意なんです。だけどその一芸を開いてくださったのは、『十二夜』の蜷川さんの演出のおかげかな、と。(市川亀治郎)

は御殿女中でしたから初演の時はきっちり着ていたが、再演の時から少しあばずれっぽいところがあったらいいと思ったのです。それで衣裳を着た後に四股を踏みました。女形の衣裳を着た時に、必ず四股を踏んで着崩れ、ゆるく出ていくと、肩の線がちょっと出るから下品に見えるわけです。麻阿は当初はびしっとした髪型だったのですが、額の横に一本髪の毛を出すことによってちょっと男にだらしないうところを表現したりとか、自分なりにその新たな女形の見え方を考えました。

プロデューサー、演出家として考えること多きこの頃

N 今の松本幸四郎さんが染五郎の時代に勉強会「木の芽会」があって、それを観に行ったことがあります。「若い歌舞伎の役者さんたちは会を立ちあげて、こうやって勉強するんだ」と思いましたが、亀治郎さんも特別な思いがあってご自分の会をお作りになったのですか。

I 理想の配役でしかも自分が全責任を取ってやる形を考えた時に「自分で全部お金を出してやればいいんだ」と自然に思いました。だから初めは銀行に行くところから始まりますよ。銀行も利益を出すものなのか、出さないものなのかと判断に困らしいです(笑)。

N 一つ目の作品は何でしたか。

I 玉手御前、『撰州合邦辻』です。すごく戯曲が面白いのになんでこんなに退屈なのだろうと近年の舞台を思っていたんです。やってみますと合邦は作品とか着眼点はすばらしいが、何がだめにしてしまったかという、先人の役者の勝手に戯曲を無視した工夫、表面だけの解釈でやってしまった工夫が作品をつまらなくしたと気づきました。だからそういうのを一切やめて、原本に戻してやってみようということでやったら意外と面白いという声をいただいたのです。

N 僕は戯曲でしか読んでないが、『合邦』って面白いですよ。

I だから前半の台本作りはいろいろな資料調べたりで大学の卒論を書いている気分でした(笑)。

N ということは、自分がプロデューサーであり演出家であり主演であるということですね。昔の一座みたいな。

全部がわかりすぎると無理難題が言えなくなるというのがありません。だから演出家は我を張る勇氣も必要な場合があります。何を守って、何を捨てられるかだと思いますが。

I 結局戯曲のカットも同じではないですか。どこの場面を犠牲にするかです。

N 僕は7月に上演する井上ひさしさんの『道元の冒険』(’72年)という、道元を主題にした芝居の準備をしていますが、その台本が4時間、5時間かかるくらいに厚いんです。その後上演された『新・道元の冒険』の台本があるので、新旧を見比べなが

らカットをしてみました。そうすると大変な作業でね。作家は書くことに命をかけているということがあるから、うっかりカットもできなくて、鬱々たる日々を送っているところなんです。

I 4月の公演『風林火山』では、稽古に入る時「初日に台詞を覚えてこないでくれ。台詞を覚えられるとカットするのが忍びなくなるので、絶対覚えなくてください」と演出としてお願いしました(笑)。どうしてかという僕は書きを台詞にしているものから、役者が何回も稽古して入れれば良いわけだと座付き作家が言ってくれました。この人とはとてもやりやすかったです。一字一句厳しい人がいますが、歌舞伎役者は一字一句めちやくちやですからね(笑)。

プロデューサーなどが見に来て、「この芝居面白いね」といった場合、喜んでいいのか、そういうのも難しいですね。

N 僕は一切そういうのは信用していません。僕は客入れの時は受付付近にいて、芝居中は客席の一番後ろで見えています。「俺は千の目が入っている観客なんだ」と思いながら、お客さんの反応を背中越しに見て、自分の目でマイナスすることを厳密にチェックして舞台をジャッジするんです。「よし大丈夫」「失敗した」と密やかに。俳優は前線で戦っているの、批評が良かろうが、悪かろうが常にお客さんの前でやらなければいけないので、彼らを僕が守ります。

I そのあたりでは役者を自分でもやっているせいか、演出家は役者に気を使ってやるとだめだなと感じています。どうですか。

N そうですね。僕は傷つけた方がいいと思うところは傷つけてしています。

I どうやって傷つけるのですか。その傷つけ方を教わらないと。テレビの芝居でも、自分の芝居以外では気を抜いている人がいて、舞台との違いに驚いたのです。そういう時はどうしたらいいんですかね。

N そういう時は物をぶつけた方がいいですよ。

I 今度投げ方を、タバコを吸わないので灰皿がないのです(笑)。

N 靴! 靴もちょっと外れるように投げる。靴の投げ方を教えたところで終わりです(笑)。今日はどうもありがとうございました。

NEWS 「知らざあ言って聞かせやしょう!!」の名台詞。7月の熊谷会館で開催される、松竹大歌舞伎『白浪五人男』に弁天小僧で出演決定。詳細はP.22



profile: 市川亀治郎 (いちかわ かめじろう)
1975年東京生まれ。四代目市川段四郎の長男。慶應義塾大学文学部卒業。1983年7月歌舞伎座「御目見得太閤記」で二代目市川亀治郎を名乗り、初舞台を踏む。以降、立役から女形まで意欲的に活躍し、蜷川幸雄演出の『NINAGAWA 十二夜』にも出演。最も目の離せない歌舞伎界の若手の一人。NHK大河ドラマ『風林火山』で演じた武田信玄は、テレビ初出演とは思えない存在感を放ち話題となった。この7月には熊谷会館・松竹大歌舞伎の『白浪五人男』に出演、女装も美しい弁天小僧の好演が期待される。

さいたまゴールド・シアター 第2回公演での 蜷川幸雄の 挑発に注目せよ



[95kgと97kgのあいだ] 初演 1985年(ベニサン・ピット)

ゴールド・シアターの面々と、若手俳優が舞台上で対立する。間に立って2つの集団を挑発するのは蜷川の信頼が厚い、文学座の横田栄司。劇場としては小空間である大稽古場を、80人もの出演者が埋め尽くす——。日本では異色の演劇集団である「さいたまゴールド・シアター」。その第2回公演は、やはりというべきか、既成の演劇にない新しい試みとなった。作品は『95kgと97kgのあいだ』(清水邦夫作)。蜷川は「従来の芝居の概念を揺るがすことができれば」と奮い立っている。

80年代戯曲での第2回公演、その意味を蜷川が語った

まず、戯曲のタイトルが意味深である。95kgと97kg。その重量の差は、何を意味するのか。「2kgというのが清水にとって大事なのだろうし、面白いよね。重いともいえるし、たったそれだけ、ともいえる」と蜷川。

1985年初演のこの戯曲は蜷川の盟友、清水の作。蜷川の伝説的な演出デビュー作『真情あふるる軽薄さ』(1969年初演)の続編ともいえる作品だ。この作品を上演すべく、稽古している現代の若い俳優がまず舞台にいる。そこに、この芝居をかつて演じた「群衆」が乱入し、なぜか重い荷物を背負い始める。しかし「95kg」は持ち上げられても、「97kg」で挫折する。

この、2kgの差をどう扱うかが演出のひとつのポイントとなるが、蜷川は「かつてラジカルに闘った人々と、関わらなかった

人々の体験の差、と語っている。「真情…」は、全共闘運動の争乱をそのまま舞台化したような作品だが、当時の「怒れる若者」とゴールド・シアターはほぼ同じ世代。彼らが30年以上のちに「真情…」の稽古場に乱入する、というのが今回のしつらえだ。乱入される側の若手俳優を演じるのは、ニナガワ・スタジオ。戯曲の世界が極めてリアルに舞台化されるこ

© 宮川舞子



とになる。

やはり蜷川が演出した初演の稽古では、2kgの差を体感するため、実際に95kgと97kgの砂袋を用意したという。「これがほとんど違わないんだ。どちらも重くてね」と蜷川は笑う。ゴールド・シアターの面々は、もっと軽いものでも持ち上げられないかもしれない。それも「脱落者の意味とクロスさせるなど、生かすことができる」と蜷川は考えている。

ゴールド・シアターは、なかなか難しい集団だ。40数人の高齢者が出演できる戯曲というだけで、既成の作品にはほとんどない。記憶力への不安もある。今年3月の稽古場公演『思い出の日本一万年』では初日にセリフが混乱。公演開始から25分一度、蜷川が舞台を止め、最初からやり直した。

でも一方で「生活者として生きてきた人が大勢いる」(蜷川) 集団でもある。その特質が、群衆の役なら生きる。さらに彼らが若手俳優と、「プロの言葉で群衆をアジェーションできる」(蜷川) 横田栄司と共に舞台上に立てば、それだけで既成の演劇にないものになる。

さらに蜷川はゴールド・シアターが「リアルの質を変質させることができる」と期待している。「映画におけるロッセリニ(監督)のネオリアリズムのようなことができないかと。職業的俳優ではない生活者が劇空間を作ることで、演劇のリアルの幅が広がる可能性がある」。無名の人々を活用したドキュメント・タッチの映画と似たことができる。集団の難しさを逆手に取れば、新しい演劇の地平を拓くことができるというのだ。

こうした演劇的挑戦を抜きにしても、蜷川には以前から気になっていたことがあった。「ゴールド・シアターの稽古によくニナガワ・スタジオが手伝いに来るんだけど、仲がいいんだよ。お年寄りと若者が一緒におにぎりや煮しめを食べたりね。何だか『疑似家族』みたいで、僕には新鮮だった」。この年齢差を超えたつながりも、舞台に思いがけない成果を生むかもしれない。

Profile

さいたまゴールド・シアター

蜷川幸雄率いる、55歳以上の団員43名(平均年齢68歳)による演劇集団。個人史をベースにした身体表現による、これまでにない演劇を追求している。2006年、1200名を超える応募者から選ばれた48名によって発足、「Pro-cess」と名付けた2度の中間発表を成功させる。2007年6月、岩松了書き下ろしによる第1回公演『船上のピクニック』を上演。実人生が反映された演劇が大きな話題を呼んだ。2008年3月には「Pro-cess3」『思い出の日本一万年』(作:清水邦夫)を上演、好評を博した。

NINAGAWA STUDIO

1984年、演出家、蜷川幸雄によって若い世代の俳優、スタッフを集めて演劇集団GEKI-SYA NINAGAWA STUDIOとして創設。以来、従来の劇団としての組織ではなく、個々の自立した個性の集まりとして独特な活動を続ける。いわゆる養成所の俳優訓練ではなく、稽古場での実践的なエチュードを通じて俳優の訓練を行っている。

横田栄司 よこた えいじ

東京都出身。文学座座員。これまで舞台、映画、テレビと幅広く活動。主な舞台に、さいたま芸術劇場では『リチャード三世』『近代能楽集』『タイタス・アンドロニコス』『リア王』がある。ほかに『ひばり』『カリギュラ』『ヴェニス商人』など。本年5月には、さいたまゴールド・シアター第2回公演『95kgと97kgのあいだ』に客演。それ以外では映画『独立少年合唱団』、テレビ『私立探偵・濱マイク』第一話など。



さいたまゴールド・シアターのこれまでの公演



「Pro-cess ~途上~」
2006年7月(大稽古場) 撮影:幸田 森



「Pro-cess 2」『鴉よ、俺たちは弾丸をこめる』
2006年12月(大稽古場) 撮影:幸田 森



第1回公演 『船上のピクニック』
2007年6月(小ホール) 撮影:宮川舞子



「Pro-cess 3」『思い出の日本一万年』
2008年3月(大稽古場) 撮影:宮川舞子

●●●●PLAY●●●●

さいたまゴールド・シアター 第2回公演 95kgと97kgのあいだ

[日時] 5月28日(水)~6月5日(木) 全10公演

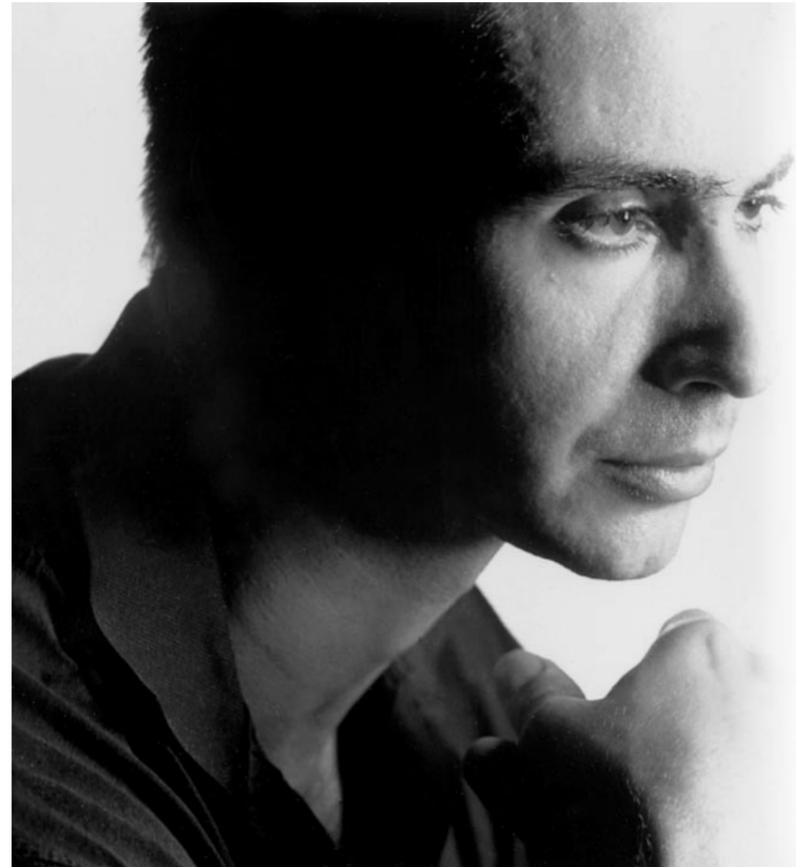
[会場] 彩の国さいたま芸術劇場 大稽古場

[作] 清水邦夫 [演出] 蜷川幸雄

[出演] さいたまゴールド・シアター NINAGAWA STUDIO 新川将人 野辺富三
宮田幸輝 西村篤 市川貴之 太田篤子 / 横田栄司 ほか

[チケット(税込)] 好評発売中 全席自由 椅子席:2,500円/機数席:2,000円
(機数席は演出上の都合により開演10分前に入場案内となります。)

2008年5月	28	29	30	31	6月	1	2	3	4	5
曜日	水	木	金	土	日	月	火	水	木	
14:00		●	●			●			●	●
18:00				●			休演			
19:00	●	●						●	●	



©Jean-François Bérubé

『眠れる森の美女』 『白鳥の湖』& ラ・ラ・ラが挑む

ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップスの最新作『Amjad アムジャッド』。男女ともトゥシューズをつけて踊るシーンでは、女性は強く美しく、男性は繊細ですらある。「現実社会で、弱い女性なんて会ったことありませんから」と語る振付家エドゥアール・ロックに、この作品に込めた思いを聞いた。

取材・文=鴨澤章子 (フリーライター、ロンドン在住)

「彩の国さいたま芸術劇場に行くのを今から楽しみにしています。とにかく劇場自体が素晴らしいですから。(舞台が) 黒塗りなので、ライティングが完璧にできるし、何よりスタッフがいい。どんな要求にもすぐに誠実に応えてくれたのには本当に驚きました」

カナダのダンス・カンパニー、ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップスを率いる振付家、エドゥアール・ロックが懐かしげに言うのも無理はない。同劇場では『ソルト』を世界初演するなど過去3回公演を行ない、それだけに馴染み深いものがあるようだ。今年の公演は『アメリカ』以来4年ぶりのこと。作品は昨年、カナダの首都オタワで初演された『Amjad アムジャッド』。作品にストーリーを持ち込まず、激しく揺き鳴らされるロックミュージックとともに過激とも言えるダンスを繰り広げてきたロックが、こともあろうにチャイ

コフスキーの『白鳥の湖』と『眠れる森の美女』をモチーフに採り上げたことで、ダンス・ファンを騒然とさせた作品だ。

「チャイコフスキー自体は初めてではないんです。1988年にオランダ国立バレエの依頼で別の楽曲を振付けましたから。チャイコフスキーは当時まだレベルが低いとされていたバレエ音楽にシリアスに取り組んで、芸術の高みへと引き上げた最初の人物だし、物語も人間めいた動物が出てきたりと奇妙なおとぎ話のようで、とても面白いと思いました」

とは言ってもロックのこと。普通に話をなぞるわけではない。二つの話は複雑に絡み合い、イメージが交錯し、ダンサーは人間とも妖精ともつかない、あるいは男とも女ともわからない変化を遂げ、妖しいまでに美しい世界へ観客を誘う。音楽ももちろん、チャイコフスキーをベースにしているものの、時にはジャズ・アンサンブル風に、時にはノイズを入れた電子音楽にアレンジされ、その旋律に聞き覚えはあっても鮮烈さが圧倒的だ。

「音楽も舞台美術も最初に説明をするだけで、あとは一切、僕は口を出さない。音楽は3人の作曲家に頼んでいるんだけど、その3人の間でも打ち合わせはなしですから。それで出てきたときに、どれだけ僕を驚かせてくれるかがポイントだと思っています」

完璧主義者として知られるロックは、作品に関わる全てを陣頭指揮するかのようと思われるが、相手をクリエイターとして認めているからこそ、こうした作品づくりができるのだろう。特に音楽を担当した一人、ギャヴィン・ブライヤーズ(著名なイギリスの現代



©Edouard Lock

作曲家)には絶大な信頼を寄せている。

「そう言えば、ギャヴィンがこの仕事を依頼してからしばらくして僕に電話してきて、『知ってる? チャイコフスキーってすごい作曲家だよ』って。(笑) 彼はそれまでまったくチャイコフスキーに興味がなかったのだと思うけど、それだけ新たな発見があってこの仕事を楽しんだのだと思う」

カンパニーにとっても、このモチーフを選ぶことによって新たな収穫があったのではないだろうか。

「カンパニーにとっては毎日が新たな試みですから。確かにトゥシューズを履くことを選んだように、過去において大きな変化を迎えた時もありますが、チャイコフスキーも以前にやりましたし、男性ダンサーがポアントで踊るのも初めてではないです」

言葉少なに話すロックだが、『Amjad アムジャッド』はロマンティック・エラ(ロマン主義期)のバレエに対する、彼なりのオマージュとも言えるだろう。

「確かに、この2作品に関しては自分なりの記憶がありますし、ありとあらゆるバージョンのものを観て来ました。この時代にバレエはひとつのスタンダードとしての形を成しましたし、非常に意義のある時代だと思います。ただ、もちろん、昔のことでなにひとつ映像は残っていないわけですから、本当はどう踊られていたかなんて誰も知らないわけです」

有名すぎる2作品なだけに、誰をもが持っている“記憶”を逆手に取り、そこに彼独自の世界が展開される。昔々、お姫様はか弱く、王子様は力強く……ではなく、ロックの他の作品同様、女性は強く美しく、男性は繊細ですらあるのがある種、現代社会を反映していて爽快だ。

「だって、現実社会で、弱い女性なんて会ったことありませんから(笑)」

けれど、ハイスピードで宙に舞いながら踊るシーンのどれもがモノトーンで描かれた絵のように美しく、そこにはロマンティック・エラに通じる情感が溢れている。男性ダンサーがポアントで踊るパド・ドゥでは、女性も男性も自立していて、ゆらゆらと決して交わらないのが悲しい現代の恋愛を見ているようだ。

実は『Amjad アムジャッド』というタイトルは、ロックの出生地であるモロッコの言葉で、「すばらしい」という意味を持つ。その他

に男性の名前としても女性の名前としても使われる言葉だということ聞いてみると、ロックの作品の影にはジェンダーの意味合いも込められているようだ。

「僕はもともと作品のタイトルに、意味性を持たせないんです。作品の内容とタイトルは直接的には関係がない。まず、『Amjad』という言葉が好きだったことがタイトルにした理由ですね。けれど、ジェンダーというのは、確かに認めるところはあります」

ジェンダーを超えたロマンティック・バレエ! もしかするとそれは、コンテンポラリー・ダンスのひとつの帰結なのかもしれない。

profile

エドゥアール・ロック/ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス

振付家、ダンサー、映像作家であるエドゥアール・ロックは、1954年モロッコのカサブランカに生まれ、カナダ・モントリオールで育つ。大学で中世英文学を学ぶかたわら、19歳でダンスを始め、レ・グラン・バレエ・カナディアン、グループ・ヌーヴェル・エール等に参加。1980年にラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップスの前身となったロック・ダンスーズを結成。モントリオールを拠点に、これまでにいくつ自由で大胆な作品を次々と発表する。1986年、『ヒューマン・セックス』(1985)でベッシー賞を受賞。その鋭い感覚と爆発的なエネルギーで世界のダンス・シーンに衝撃を与えた。『ニュー・デーモンズ』(1987)、『アンファント』(1991)、『2』(1995)、『アメリカ』(2002)では大規模な世界ツアーを敢行、大きな話題を呼んだ。初来日は1996年、彩の国さいたま芸術劇場で『2』を上演。2年後の1998年には埼玉県芸術文化振興財団との共同製作により、同劇場にて『ソルト』を世界初演。『ソルト』はワールド・ツアーを経て1999年に国内5都市で凱旋公演が行われ、絶賛を博した。ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップスとしての活動に加え、パリ・オペラ座バレエ団、ネザールランド・ダンス・シアター、オランダ国立バレエ団への振り付け、デヴィッド・ボウイ、フランク・ザッパのコンサートの演出等、その活動は幅広い。

●●●● DANCE ●●●●

ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス 『Amjad アムジャッド』

【日時】7月4日(金) 開演 19:30 5日(土) 開演 18:00
6日(日) 開演 16:00

※4日の公演終了後、エドゥアール・ロックによるポスト・パフォーマンス・トークを行います。

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『Amjad アムジャッド』(2007年初演) 【振付】エドゥアール・ロック
【音楽】ギャヴィン・ブライヤーズ デヴィッド・ラング フレイク・ハルグリヴス
【出演】ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス ダンサー9名 ミュージシャン4名
【チケット(税込)】好評発売中 一般:S席7,000円/A席5,000円/学生A席3,000円
メンバーズ:S席6,300円/A席4,500円

●●●● EXHIBITION ●●●●

ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス 写真展

【日時】4月22日(火)~7月6日(日) 9:00~22:00 (休館日を除く)

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 ガレリア 入場無料

舞台は身体のドキュメンタリー

文 = 堤 広志 (舞台評論家)

勅使川原三郎のダンスを見て、いつも思い浮かべるのは「コミットメント」という言葉である。日産自動車のCEO カルロス・ゴーン氏が「公約」「誓約」を意味するこの言葉を用いて業績を回復させたことは有名だが、勅使川原のダンスの場合、「献身」「関わりあい」といった訳語の方がふさわしいかもしれない。

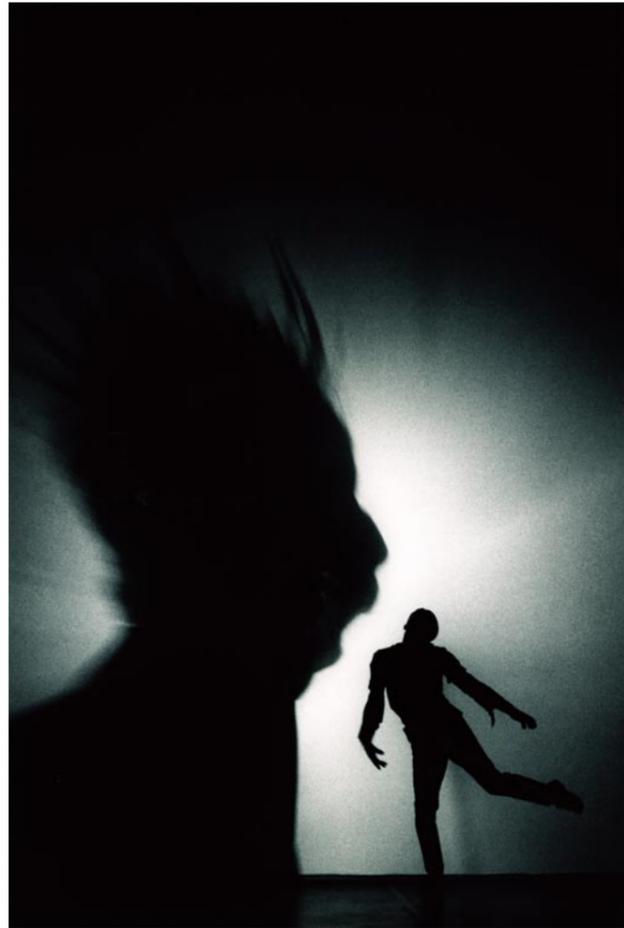
そもそも「コミットメント」(commitment)の語源は、「すべてを送る」「ゆだねる」という意味であり、古くは神に対して「魂をゆだねる」「(身を呈して)誓約する」という厳粛な要素があった。つまり、自発的に身を献じ、その場の状況に責任を負う、フィジカルな行為としてのニュアンスがある。これはそのまま、勅使川原の「ダンス」と同義と言っても良いのではないだろうか。

というのも、今や伝説となっている^{ひのえまた} 榎枝岐でのパフォーマンスが思い起こされるからだ。80年代初頭、勅使川原は福島県の山奥で土中に首まで埋まり、8時間耐え続けるというパフォーマンスを行ったことがある。夕立で地面が膨張し、筋肉は収縮して、掘り起こされても立つことができなかった。しかし、「血行が戻ってきて立ってみると体が空気によって支えられているような不思議な感じ」を覚えたという(『日本経済新聞』2001年3月19日夕刊・インタビュー:河野孝氏)。

この体験が勅使川原のダンスの原点となっている。以来、彼は身体を取り囲む空気や呼吸を意識したダンスを創作し続けているのだ。そして、あえて手強い環境に身を投じながら、その場の状況とアクチュアルに向い合い、常に皮膚感覚のように鋭敏な感性を働かせて、即興的に踊る。今も土の中から出た時のように。

『Here to Here』にはそんな勅使川原のスタンスが端的に表れている。舞台は真っ白い布の壁で三方と天井を囲まれた何もない空間。一切の装飾を排除したホワイトキューブに身を投じて、卓抜した集中力と持てる技量のすべてをさらけ出し、一度も退場することなく約55分間を一人で踊りきる。陰翳礼讃をイメージさせるような微妙な階調のライティング、布の壁を効果的に利用した驚愕の演出(これは観てのお楽しみ)には、個人の内面と外部の他者との関係を象徴するような深い精神性さえ感じられる。95年にドイツ・フランクフルトで初演され、その後ヨーロッパを中心に世界11カ国17都市で公演。日本では、97年銀座セゾン劇場(現ル テアトル銀座)の公演以来、待望の再演となる。

かつて勅使川原は、筆者のインタビューに応じてこうも語っていた。「僕は舞台で行われることは、ある種のドキュメンタリーみたいなものだと思うんですね。何かを再現するの



勅使川原三郎『Here to Here』。1995年フランクフルトで生まれたこの作品は、初演から2年で世界17都市を巡った名作。それから10年、再演の声を受け、昨秋イタリア、フランスで復活上演された『Here to Here』が、遂に彩の国さいたま芸術劇場に登場。真っ白な光の壁で、三方と天井を囲むインスタレーションの中、一瞬一瞬と身体で切り結ぶ勅使川原ならではの美学が際立つソロ・ダンス。



ではなく、そこで新たなものを生み出すのです」。

一瞬一瞬をその場その時と斬り結び、生成と消滅を繰り返しながら、更新を重ねていく。究極のソロダンスにあなたも是非コミットしてもらいたい。

公演評

“純粹で神秘的な、禅の墨絵の如く陶酔的な作品”

(1996年10月25日 Le Figaro 紙)

“無と静寂の場であると同時に凝縮されたその空間は、物事の隠れた質感を明らかにするのである。”

『Here to Here』は、ものに息吹を吹き込むような感覚によって構築された作品である”

(Frankfurter Allgemeine Zeitung 紙)

PROFILE

勅使川原 三郎

Saburo Teshigawara



©Bengt Wanselius

クラシックバレエを学んだ後、1981年より独自の創作活動を開始。1985年、宮田佳と共に KARAS を結成し、既存のダンスの枠組みではとらえられない新しい表現を追求。類まれな造形感覚を持って舞台美術、照明デザイン、衣装、音楽構成も自ら手がける。そのかつてない独創的な舞台作品は、ダンス界にとどまらず、あらゆるアートシーンに衝撃を与え、国際的に高い評価を得ている。自身のソロ作品、KARAS とのグループ作品の他にも、パリ・オペラ座バレエ団、フランクフルト・バレエ団、ネザーランド・ダンス・シアターなど、ヨーロッパの主要バレエ団からの依頼で作品を創作。世界的先駆者として、常に実験的でありながら完成度の高い作品を創り続けている。代表作に『石の花』『NOBJECT』『Here to Here』『Bones in Pages』『ガラスノ牙』等がある。『ガラスノ牙』で2006年度芸術選奨文部科学大臣賞。2007年、『Bones in Pages』でベッシー賞受賞。『ミロク』で2007年度舞踊批評家協会賞受賞。ダンス教育に関しても独自の理念をもち、国内外で若手ダンサーの育成に力を注ぐ。現・立教大学教授。

●●●● DANCE ●●●●

勅使川原三郎『Here to Here』

【日時】9月20日(土) 開演 16:00 21日(日) 開演 15:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『Here to Here』(1995年初演)

【振付・美術・照明・衣装】勅使川原三郎 【出演】勅使川原三郎 宮田佳 佐東利穂子

【チケット(税込)】一般:S 席5,000円/A 席3,500円/学生A 席2,000円

メンバーズ:S 席4,500円/A 席3,150円 【発売日】一般:6月7日(土) メンバーズ:5月31日(土)

interview

MICHİYOSHI INOUE



指揮者・井上道義が 埼玉会館公演で 起こすマジック

日本のリーディング・オーケストラを率いて、シヨスタコーヴィチを埼玉会館で演奏することで起きる化学反応を指揮者・井上道義は大いに期待している。日比谷公会堂でのシヨスタコーヴィチの交響曲全曲演奏会以来、ホールと音楽の関係を模索しているのだという。ソリストにはマエストロも絶賛する小曾根真を迎えて、この7月の埼玉会館では何が起る。

文 = 片桐卓也 (音楽ライター)

僕がシヨスタコーヴィチに入れ込むには訳がある

昨年秋、東京・日比谷公会堂でシヨスタコーヴィチの交響曲全曲演奏会を成功させた井上道義が、今度はNHK交響楽団を連れて埼玉会館にやって来る。

「日比谷公会堂の魅力は、舞台と客席が意外にも近いことです。2階席でも、舞台での演奏家の表情が見えるくらい。そういうホールの特性が、シヨスタコーヴィチの交響曲を演奏するのにふさわしいと思った。最近ではウィーンのムジークフェラインをお手本にした、いわゆる響きの良いホールが日本に多くなってきているけれど、音楽の魅力は、ホールの響きが良ければ伝わるというものでもないと思います。だから、埼玉会館のような歴史あるホールで演奏することはすごく楽しみです」

世界各地での豊かな指揮経験を持つ井上の発想は、常に意外性に富んでいて、新鮮な驚きをもたらす。シヨスタコーヴィチは、井上がずっと思い入れを抱いて演奏をし続けてきた作曲家である。

「いろんな政治的な文脈で語られる事が多いシヨスタコーヴィチだけど、実際には作曲家として書きたいものを書きたいように書いていただきたいと思います。今回演奏する第9番の交響曲にしても、戦勝記念として期待されていたのをわざとはぐらかした、と書かれることが多いのだけど、しかし、実際にはそうだったのか? やっぱ、こういう作品をその時に書きたいから書いていたのだと思うんです。だから、それを僕は表現するだけ。今回は非常に優れた機能を持つNHK交響楽団との演奏なので、この作品の細部の面白さが十分に引きだせると思いますよ」

井上自身も最近作曲を手がけていて、作曲家ならではの視点からもシヨスタコーヴィチを見つめている。その面白さも、今回の演奏会で期待できそうだ。

PROFILE

指揮 井上道義 MICHİYOSHI INOUE

1971年グッド・カンテリ指揮者コンクール優勝。83～88年新日本フィル音楽監督、90～98年京都市響音楽監督・常任指揮者、2000～03年新日本フィル首席客演指揮者、07年1月よりオーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督ならびに石川県立音楽堂アーティストティック・アドバイザーに就任。シカゴ響、ロイヤル・フィル、ミュンヘン・フィル、スカラ・フィル、レニングラード響、マルセイユ歌劇場等にも客演。99年よりBunkamuraオペラ劇場《トゥーランドット》を3年間にわたり指揮。エディンバラ公演も現地の聴衆に新鮮な衝撃を与えた。近年では、新日本フィルとともにマラー・チクルス、3年にわたるコンサート・オペラ・シリーズなど意欲的な活動を展開しており、各方面から絶賛されている。

ピアノ 小曾根 真 MAKOTO OZONE

父、小曾根 実の影響でジャズに興味を持ち、独学で音楽を始める。1983年、ボストンのバークリー音楽大学ジャズ作曲・編曲科を首席で卒業。同年6月、カーネギー・ホールでソロ・ピアノ・リサイタルを開き、米CBSレーベルと日本人初の専属契約を結ぶ。ジャズの世界を越えた幅広い活動を展開しており、近年は、ガーシュウィンやモーツァルトの協奏曲など、クラシック音楽にも本格的に取り組んでいる。

●●●● MUSIC ●●●●

NHK交響楽団

【日時】7月13日(日) 開演 14:00

※13:30～13:40に指揮者・井上道義氏によるプレコンサート・トークあり。

【会場】埼玉会館 大ホール

【出演】井上道義(指揮) 小曾根 真(ピアノ) NHK交響楽団(管弦楽)

ハイレベルな共演者たちとの音楽に期待

さらには、ジャズ・ピアノの雄・小曾根真をソリストに迎えた《ラブソディー・イン・ブルー》も話題となりそうだ。

「小曾根君とはすでに何度も共演しているけれど、本当にこういうガーシュウィンのような作品の演奏にかけては、いま世界でもトップのピアニストと言って良いでしょう。ジャズに詳しいのはもちろんなんですけど、音楽的なセンスの良さは、クラシックのピアニストにはなかなか無いもので、非常に得難い個性だと思います。彼と共演する時はいつも新鮮だし、ルーティン・ワークにならない。それが共演する楽しみとなっています」

前半はそこにコーブランドの組曲《ビリー・ザ・キッド》を加えたプログラム。前半はアメリカ音楽、後半にはシヨスタコーヴィチといういかにも井上らしい選曲と言えるだろう。

「NHK交響楽団と共演するということで期待しているのは、やはりそれぞれの楽器のセクションに優れたプレイヤーが多いということ。だから、個性的な作品を集めても、それをきちんと音楽的に表現してくれるだろうと思います。なにより、普段のNHKホールよりも近い距離でN響を聞くチャンスなんですから、ぜひ、聞きに来て欲しいです」

ライブ感を大切に井上ならではの指揮が、埼玉会館で堪能できる貴重な機会を逃さないようにしたい。



管弦楽 NHK交響楽団 NHK Symphony Orchestra, Tokyo

1926年にプロ・オーケストラとして結成された新交響楽団が、日本交響楽団の名称を経て、51年NHK交響楽団と改称。今日に至るまで、カラヤン、ストラヴィンスキー、アンセルメ、マタチッチなど世界一流指揮者を次々と招聘し、歴史的な名演を残している。国内での演奏会のほか、定期的な海外公演、セミ・ステージ・オペラなどの新々な企画、委嘱作品の充実、メジャー・レーベルとのCD録音など、その活動と演奏は国際的にも高い評価を得ている。

【曲目】コーブランド:組曲《ビリー・ザ・キッド》

ガーシュウィン:ラブソディー・イン・ブルー

シヨスタコーヴィチ:交響曲第9番 変ホ長調 作品70

【チケット(税込)】好評発売中

一般:S席6,500円/A席5,500円/B席4,500円/学生B席2,000円
メンバーズ:S席5,850円/A席4,950円/B席4,050円



ベルリン・フィルの最高のメンバーで やわらかな響きに包まれる贅沢なひとときを

世界の頂点に立つオーケストラ、ベルリン・フィルハーモニーのメンバーで構成された
木管五重奏団の演奏会が実現する。
その高い演奏能力によって、木管五重奏のアンサンブルの魅力が
最高のかたちで楽しめることになるだろう。

文 = 堀江昭朗 (音楽ジャーナリスト)

巨匠カラヤンと活躍してきた名だたる強者たち

なぜか、木管楽器のフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットに金管楽器のホルンが加わった混成アンサンブルなのに「木管五重奏」と呼ぶ。この4種類の木管楽器は、オーケストラではど真ん中が定位置なのだが、極端に言うともオーケストラの音色に変化をつけるためにいるとも言える個性的な楽器たちだ。それをうまくつなぎあわせているのが、柔らかい音色のホルン。この組み合わせを誰が考えたのか、とにかく変化に富んだスリリングなアンサンブルが大きな魅力となっている。それだけに、1人1人の奏者に高いレベルの技量が求められるのだが、世界のトップ・オーケストラであるベルリン・フィルのメンバーによる木管五重奏団は、極め付きのアンサンブルだ。

ベルリン・フィルと言えば巨匠カラヤン(1908～98)。今ならカリスマ指揮者とも言われるのだろう。歴史に名を残す彼が、他に類を見ないほど精密な演奏のできるオーケストラへと磨き上げた。機械仕掛けのように寸分の狂いのないアンサンブルながら、メンバーたちは演奏を心から楽しんでいることが彼らを世界のトップに立

たせ続けている理由だ。団員同士でいろんな形の室内楽を組んでいるのも特徴。どの団体も目を見張るような演奏を披露してくれるが、もちろんこの木管五重奏団もそのひとつ。今ではカラヤンの晩年を知る数少ない団員たちによるアンサンブルとなった。

木管五重奏の名曲をその絶妙なるテクニックで

今回のプログラムは、木管五重奏の楽しさを多方面から楽しめるものとなった。各楽器が個性的であるのが魅力と書いたが、モーツァルトの作品では音色を溶け合わせる繊細なテクニックが必要。続くベートーヴェンの作品も同様だ。それを熟知したフルートのハーゼルが編曲している。後の3曲はこの編成のためのオリジナル作品。近現代の響きを感じさせるところが魅力で、かえって親しみやすいのではないだろうか。 Hindemith の作品はそれぞれの楽器のソロ演奏をうまく取り入れながら、最後は溶け合い盛り上がる名作。ミヨーの作品はフランスらしい粋な小品が組み合わせられた雰囲気のある組曲。最後のタファネルの作品は技巧的に書かれていて、メンバーたちの確かな腕前を楽しみながら、変化に富んだ面白さを感じさせてくれる。木管五重奏が、実はすんなりと楽しんでしまえる室内楽の形であることも、きっと体感していただけるに違いない。

Profile
ベルリン・フィルハーモニー木管五重奏団

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーによる、初の常設木管五重奏団として1988年に結成。以来、現在までの20年間同じメンバーで、音楽的にも精神的にもハイレベルを維持したアンサンブルとして、世界中の音楽祭やツアーで活動し、世界の聴衆はこのアンサンブルの音色、表現の幅に賞賛を送り続けている。今回で9度目の来日。

●●●● MUSIC ●●●●

ベルリン・フィルハーモニー木管五重奏団

【日時】10月4日(土) 開演 17:00 【会場】彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
【出演】ミヒャエル・ハーゼル(フルート) アンドレアス・ヴィットマン(オーボエ) ヴァルター・ザイファルト(クラリネット) ファーガス・マックウィリアム(ホルン) ヘニング・トローク(ファゴット)
【出演】モーツァルト(ハーゼル編曲):自動オルガンのための幻想曲 へ短調 KV608
ベートーヴェン(ハーゼル編曲):六重奏曲 変ホ長調 作品71 ヒンデミット:5つの管楽器のための小室内音楽 作品24-2
ミヨー:組曲《ルネ王の暖炉》 タファネル:木管五重奏曲 短調
【チケット(税込)】一般:4,500円/学生1,500円 メンバーズ:4,050円 【発売日】一般:5月31日(土) メンバーズ:5月24日(土)



メシアン生誕100年を記念して、
彩の国さいたま芸術劇場(第1・3回)・フィリアホール(第2・4回)
浜離宮朝日ホール(第5回)でプロジェクトを開催

第1回

児玉 桃 メシアン・プロジェクト2008

いざな
～メシアンの世界への誘い～ ナビゲーター・野平多美

文 = 野平多美 (作曲家・音楽評論家)

話題の茂木健一郎氏を迎えて、メシアンの魅力を探る

作曲家には、「サイン」がある。そう、絵画の隅に画家が記す「サイン」のように、音楽の中には実はそれぞれの作曲家独特の語法、すなわち「サイン」が潜んでいて、それを耳にしたとたん、誰の曲かわかるというわけである。演劇において、台詞まわしで脚本家がわかるとか、舞台の立ち位置で演出家がわかるということと同じように。そして「サイン」の形や意味を知れば、曲を聴く楽しみも倍増する。

生誕100年を今年迎えたフランスの20世紀の巨匠、オリヴィエ・メシアンも、とてもはっきりとした「サイン」を持った作曲家である。そして、メシアンの「サイン」をいろいろな観点から探りながら、今年の秋に予定されているパリ在住の実力派ピアニスト、児玉桃の演奏会シリーズ「メシアン・プロジェクト」を聴くための準備をしようというのが、第1回のレクチャー&コンサートのコンセプト。

メシアンにはどんな横顔があるかを知ること、曲を吟味するために欠かせない。アヴィニョン生まれで、敬虔なカトリック信者のインテリ家庭に育ち、パリの聖トリニテ教会の正オルガニストを終身務めたメシアンは、一方で、とても自然を好み、鳥類学者という肩書きを持つほど小鳥たちを愛していた。もう一つの作品の源泉は、イヴォンヌ・ロリオという優れたピアニストを夫人にもっていたこと。よい演奏家がそばにいと、作曲家は創作の欲望にかられるものである。そして、メシアンは、色彩にもとても深い興味を抱き、音楽に常に色を感じていたという。

これらについて、児玉桃さんのライブ演奏を聴きながら、またその際にメシアンの脳の働きがどうなっていたのかを、話題の脳科学者、茂木健一郎氏に伺いながら、さまざまな作品に迫ってみたい。

茂木氏は、最新著『すべては音楽から生まれる』で、クラシックの演奏会におけるご自身の感動の実体験を語っていらっしゃる。音楽と人間の関係、また少し的を絞って、作曲家が創作する際の脳の働きについてなども伺えるかもしれない。

さあ、是非この機会にメシアンの世界をのぞいてみませんか？

●●●● MUSIC ●●●●

メシアン生誕100年記念特別企画 児玉 桃 メシアン・プロジェクト2008

〈第1回〉レクチャー&コンサート「メシアンの世界への誘い」

【日時】9月13日(土) 開演 14:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
【出演】児玉 桃 (トーク&ピアノ) 野平多美 (ナビゲーター) 茂木健一郎 (ゲスト)
【チケット(税込)】 好評発売中 2,000円 ★全5回シリーズ券:18,000円
※プロジェクトの詳細は財団ホームページ及びhttp://kodama2008.com

Profile

児玉 桃 (ピアノ)
幼少の頃よりヨーロッパで育ち、パリ国立高等音楽院に学ぶ。1991年、ミュンヘン国際コンクールに最年少で最高位に輝く。その後、ケント・ナガノ指揮ベルリン・フィル、小澤征爾指揮ボストン響、モントリオール響など、世界のトップ・オーケストラと共演。ソロ、室内楽においても世界の主要国際音楽祭などで活躍。今年ルツェルン音楽祭への参加や、小澤征爾指揮水戸室内管弦楽団とのヨーロッパ公演のソリストにも抜擢されている。パリ在住。

野平多美 (作曲家・音楽評論家)
パリ国立高等音楽院作曲理論各科卒業。1990年帰国。以来、2002年まで国立音楽大学、東京学芸大学等で教鞭をとるほか、作曲・編曲活動とともに、音楽評論や企画など、幅広く活躍している。現在、アフィニス文化財団AES 専門委員。著書に『魔法のパゲット〜マエストロ・ジャン・フルネの素顔』などがある。

茂木健一郎 (脳科学者)
ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー、東京工業大学大学院連携教授、東京藝術大学非常勤講師。クオリア(感覚の持つ質感)をキーワードに脳と心の関係を研究している。NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」キャスターを務め、音楽への造詣も深い。

〈第3回〉児玉麻里&桃 ピアノ・デュオ 「アームスの幻影」とメシアンが愛した作曲家たち

【日時】10月25日(土) 開演 14:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
【出演】児玉麻里 児玉 桃 (ピアノ・デュオ)
【曲目】ラヴェル:マ・メル・ロフ
モーツァルト:2台のピアノのためのソナタ 二長調 KV448 (375a)
メシアン:アームスの幻影
【チケット(税込)】一般:S席4,000円/A席3,000円
学生A席1,000円
メンバーズ:S席3,600円/A席2,700円
【発売日】一般:5月31日(土) メンバーズ:5月24日(土)

パリ国立高等音楽院卒業。プゾーニ国際コンクール等、数々の国際コンクールで優勝、上位入賞を果たす。ロンドン・フィル、ベルリン・フィルとの共演などをはじめ、欧米各国で活動を開始し、オーケストラとの共演、リサイタル、音楽祭への出演等、精力的な演奏活動を展開。1995年にはカーネギーホールでニューヨーク・デビュー、ロサンゼルス及び東京での「ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全曲演奏会」は高い評価を得た。

児玉麻里 (ピアノ)

EVENT CALENDER 2008.5.15 - 2008.7.31

Event calendar table for May and June. Columns include date, day of the week, and event details such as 'MUSIC 光の庭プロムナード・コンサート' and 'PLAY さいたまゴールド・シアター 第2回公演'.

Event calendar table for July. Columns include date, day of the week, and event details such as 'DANCE ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス' and 'CINEMA 彩の国シネマスタジオ'.

3歳以上のお子さんから楽しんでいただける公演です。光の庭プロムナード・コンサートには年齢制限はありません。

ADVANCED TICKET SPECIAL

シェイクスピア・シリーズ第20弾は、傑作喜劇『から騒ぎ』に決定!!

いよいよ喜劇の真打ち、『から騒ぎ』が登場します。これまでシェイクスピア・シリーズでは、『十二夜』(第2弾・1998年)、『お気に召すまま』(第14弾・2004年)、『オールモールのシリーズ第1弾』を上演していますが、この『から騒ぎ』を入れた3本が傑作喜劇と言われ、シェイクスピア円熟期に書かれました。その中でもとりわけ祝祭性に富み、幸福な喜劇と言われているのが『から騒ぎ』。これまでも話題をさらってきたオールモールのシリーズ第4弾での上演で、ベネディック役に舞台初出演で、新鮮な魅力の小出恵介、ピアトリス役には若手実力派、高橋一生が出演することも大いに楽しみな舞台となります。



【日時】10月7日(火)～23日(木) 全18公演 【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【演出】蛭川幸雄 【作】W.シェイクスピア 【翻訳】松岡和子
【出演】小出恵介 高橋一生 長谷川博己 月川悠貴 吉田鋼太郎 瑛川哲朗 ほか
【チケット(税込)】一般:S席9,000円/A席7,000円/B席5,000円/学生席2,000円 メンバース:S席8,100円/A席6,300円/B席4,500円
【発売日】一般:6月21日(土) ※メンバーズ優先予約は、プレオーダーシートをご覧ください。

前売りチケット発売情報(～2008.7.15)

CINEMA 彩の国シネマスタジオ
「わたしたちの『今』を考えるドキュメンタリー特集」
『水になった村』・『いのちの食べかた』
「暮らし」と「食」のあるがままを描いた話題作。現在の私たちの「今」を見つめるドキュメンタリー作品特集です。
チケット発売日 一般・メンバーズ:5月17日(土)
日時:7月11日(金) 12:20A/15:20B/17:30A/19:50B
12日(土) 10:00A/12:20B/15:20A/17:30B/19:50A
13日(日) 10:00B/12:20A/15:20B/17:30A
※7/11(金)および13(日)12:20上映回終了後、大西監督によるアフタートークあり
※7/12(土)12:20上映回終了後、「食育」についてのアフタートークあり
会場=彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール
監督=A:大西暢夫(2007年/日本/92分) B:ニコラウス・ゲイハルター(2005年/ドイツ/92分)
料金=一般:前売1,000円/当日1,200円 小中高生:前売800円/当日1,000円
2作品セット券 一般:前売1,800円/当日2,100円 小中高生:前売1,500円/当日1,800円

PLAY 音楽劇 『ガラスの仮面』
チケット発売日 一般:5月17日(土) ※メンバーズ優先予約終了 詳細はP.4～7にて

CINEMA 彩の国シネマスタジオ 埼玉会館上映会 オペラ映画『リゴレット』
ヴェルディ至高の傑作悲劇を完全映画化。豪華キャストで贈る珠玉の名作をどうぞお楽しみください!
チケット発売日 一般・メンバーズ:5月23日(金)
日時:9月26日(金) 10:00/13:00/16:00/19:00
会場=埼玉会館 小ホール 作曲=ジュゼッペ・ヴェルディ 監督=ジャン＝ピエール・ポネル
出演=ルチアーノ・パヴァロッティ(テノール) イングヴァール・ヴィンセル(バリトン)
エディタ・グルベローヴァ(ソプラノ) ほか(1982年/イタリア/117分) イタリア語版(日本語字幕あり)
料金=一般:前売2,300円/当日2,500円 メンバース:2,000円

MUSIC ベルリン・フィルハーモニー木管五重奏団
チケット発売日 一般:5月31日(土) メンバース:5月24日(土) 詳細はP.18にて

MUSIC 新日本フィルハーモニー交響楽団
充実した演奏で評価の高い新日本フィルが、音楽監督アルミンク推薦の新鋭指揮者と贈る名曲プログラム。
チケット発売日 一般:5月31日(土) メンバース:5月24日(土) ※当初発表の発売日日程から変更いたしました。
日時:10月12日(日) 開演15:00 会場=埼玉会館 大ホール
出演=クリストフ・ゲッショルト(指揮) 児玉麻里(ピアノ)
曲目=モーツァルト:ピアノ協奏曲第27番 変奏長調 KV595
チャイコフスキー:交響曲第6番 口短調 作品74 「悲愴」 ほか
料金=一般:S席6,000円 A席5,000円 B席4,000円 学生B席2,000円
メンバーズ:S席5,400円 A席4,500円 B席3,600円

MUSIC 児玉 桃 メシアン・プロジェクト2008
(第3回) 児玉麻里&桃 ピアノ・デュオ『(ア)ーメンの幻影』とメシアンが愛した作曲家たち
チケット発売日 一般:5月31日(土) メンバース:5月24日(土) 詳細はP.19にて

CINEMA 彩の国シネマスタジオ 『結婚しようよ』
吉田拓郎の名曲で彩る、父と家族の物語。
時が流れても、大切な想いは心にずっとある…。
チケット発売日 一般・メンバーズ:6月6日(金)
日時:8月8日(金) 12:50/16:20/19:20
9日(土) 10:00/12:50/16:20/19:20
10日(日) 10:00/12:50/16:20
※12:50上映回終了後、アフタートークやアコースティックギター・ミニライブを企画
会場=彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール
監督=佐々部清
出演=三宅裕司 真野響子 藤澤恵麻 AYAKO(中ノ森BAND) ほか(2008年/日本/120分)
料金=一般:前売1,000円/当日1,200円 小中高生:前売800円/当日1,000円

DANCE 勅使川原三郎 『Here to Here』
チケット発売日 一般:6月7日(土) メンバース:5月31日(土) 詳細はP.14～15にて

MUSIC 埼玉会館ランチタイム・コンサート
第5回 新日本フィルメンバーによるトロンボーン四重奏
お昼どき、1000円で気軽に楽しむクラシック!
9月は、トロンボーンにあたたかな響きをお届けします。
チケット発売日 一般:6月14日(土) メンバース:6月7日(土)
日時:9月3日(水) 開演12:10(終演予定12:50)
会場=埼玉会館 大ホール
出演=宮下宣子 山口尚人 奥村晃 門脇賢智志(トロンボーン)
曲目=テレマン:4本のためのコンチェルト ほか
料金=全席指定1,000円

MUSIC ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.7 北村朋幹
「ピアニスト100」への最年少登場から2年――
数々のステージを経て進境著しい北村朋幹の今を聴く。
チケット発売日 一般:7月5日(土) メンバース:6月28日(土)
日時:12月13日(土) 開演14:00
会場=彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
曲目=ショパン:バラード第1番 ト短調 作品23
シューマン:クライスレリアーナ作品16 ほか
料金=一般:S席3,500円/A席2,500円/学生A席1,000円
メンバーズ:S席3,150円

【チケットの購入は】 財団チケットセンター 048-858-5511 10:00～19:00(休館日を除く)
【窓口営業時間】 ●彩の国さいたま芸術劇場 10:00～19:00(休館日を除く) ●埼玉会館 10:00～19:00(休館日を除く) ●熊谷会館 10:00～17:00(休館日を除く)
●インターネット販売及び他購入に関しては、財団ホームページ http://www.saf.or.jp/ まで

発売中全公演情報 (5.17～)

3歳以上のお子さんから楽しんでいただける公演です。

PLAY

源氏語り五十四帖

日時= 第43回「権本」5月18日(日)
第44回「総角1」7月13日(日)
第45回「総角2」9月14日(日) 各回開演14:00
会場= 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
出演= 幸田弘子(朗読) 三田村雅子(解説:フェリス女学院大学教授)
料金= 全席指定 1回券2,500円 第43～45回連続券6,600円

源氏物語千年紀特別企画「源氏物語の誘惑」

日時= 6月7日(土) 開演14:00
会場= 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
出演= 原岡文子(聖心女子大学教授) スティーヴン・G・ネルソン(法政大学教授)
三田村雅子(フェリス女学院大学教授)
料金= 全席指定 2,000円

さいたまゴールド・シアター第2回公演 95kgと97kgのあいだ

詳細はP.10～11にて

松竹大歌舞伎

詳細は下枠にて

彩の国さいたま寄席 四季彩亭
～彩の国落語大賞受賞者の会 柳家三三

日時= 7月5日(土) 開演16:00 会場= 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
出演= 柳家三三 立川談春(ゲスト) 桂才紫 鏡味正二郎
料金= 一般:3,000円 メンバース:2,700円 ゆうゆう割引(学生・65歳以上):2,000円

DANCE

コンドルズ 埼玉スペシャル公演2008 『大いなる幻影』

日時=5月17日(土) 開演14:00/19:00
18日(日) 開演16:00
会場= 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール 構成・映像・振付= 近藤良平
出演= 青田潤一 石淵聡 オクダサトシ 勝山康晴 鎌倉道彦 古賀剛
小林顕作(映像出演) 田中たつろう 橋爪利博 藤田善宏 山本光二郎 近藤良平
料金= 一般:前売4,000円/当日4,500円 メンバース:前売3,600円/当日4,050円
学生席:2,000円

ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス 『Amjad アムジャッド』

詳細はP.12～13にて

CINEMA

彩の国シネマスタジオ『歓喜の歌』(2008年/日本/130分)

日時=6月13日(金) 12:45/16:15/19:00
14日(土) 10:00/12:45/16:15/19:00
15日(日) 10:00/12:45/16:15
※6/15(日)12:45上映終了後のアフタートークは、田島良一氏から石子順氏に変更となりました。
会場= 彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール 監督= 松岡銳司
出演= 小林薫 伊藤淳史 由紀さおり 浅田美代子 安田成美 ほか
料金= 一般:前売1,000円/当日1,200円 小中高生:前売800円/当日1,000円

SPECIAL PICK UP

「知らざあ言って聞かせやしょう!!」の名台詞。
白浪五人男登場で今夏の熊谷の『松竹大歌舞伎』も見逃せない。

市川段四郎をはじめ、昨年のNHK大河ドラマ「風林火山」の武田信玄役も記憶に新しい市川亀治郎ほか出演の熊谷会館大歌舞伎。演目は、三番叟の操り人形を模した市川亀治郎出演による楽しさあふれる華やかな舞踊「操り三番叟」、幹部俳優出演の「御目見得 口上」、白浪五人男が登場する「弁天娘女男白浪」と、すべてが見所聞き所です。歌舞伎をよくご覧になる方はもちろん、初めての方にもお楽しみいただける舞台です。

【日時】7月15日(火) 昼の部14:00 夜の部18:00
【会場】熊谷会館
【出演】市川段四郎 市川亀治郎 中村亀鶴 坂東竹三郎 ほか
【演目】「操り三番叟」「御目見得 口上」「弁天娘女男白浪 浜松屋より勢揃いまで」
【チケット(税込)】好評発売中
一般:特等席6,000円/一等席2,000円/一等学生席1,000円/おためし席1,000円 メンバース:特等席5,400円



MUSIC

バッハ・コレギウム・ジャパン
バッハ《ブランデンブルク協奏曲》全曲演奏会

日時= 6月14日(土) 開演17:00 会場= 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
出演= 鈴木雅明(指揮・チェンバロ) バッハ・コレギウム・ジャパン(管弦楽)
※予定枚数終了いたしました。

埼玉会館ランチタイム・コンサート
第4回 N響メンバーによる木管五重奏

日時= 6月16日(月) 開演12:10(終演予定12:50) 会場= 埼玉会館 大ホール
出演= 神田寛明(フルート) 北島章(オーボエ) 松本健司(クラリネット)
菅原恵子(ファゴット) 日高剛(ホルン)
曲目= ハイドン:ディヴェルティメント 変ロ長調 Hob. II-46 「サウンド・オブ・ミュージック」メドレー ほか
料金= 全席指定1,000円

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.5 コルネリア・ヘルマン

日時= 7月5日(土) 開演14:00 会場= 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
曲目= J. S. バッハ:パルティータ第2番 ハ短調 BWV826
ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第14番 嬰ハ短調 作品27-2 「月光」ほか
料金= 一般:S席3,500円/A席2,500円/学生A席1,000円 メンバース:S席3,150円
※4回セット券 (Vol.5～Vol.8) S席12,000円/A席8,500円

井上道義(指揮) 小曾根 真(ピアノ) NHK交響楽団

詳細はP.16～17にて

熊谷会館ファミリー・クラシック 夏休みオーケストラランド!

日時= 7月27日(日) 開演15:00 会場= 熊谷会館
出演= 飯森範親(指揮) 朝岡 聡(ナビゲーター) 上野通明(チェロ) 東京交響楽団(管弦楽)
曲目= 久石 譲:さんぽ(映画「となりのトトロ」より)
ドヴォルジャーク:交響曲第9番 ホ短調 作品95 「新世界から」より 第4楽章 ほか
料金=S席 一般:大人4,000円 子ども(3歳以上中学生以下)2,000円
親子セット(大人1枚+子ども1枚)5,500円 メンバース:大人3,600円
A席 一般:大人3,500円 子ども(3歳以上中学生以下)1,500円
親子セット(大人1枚+子ども1枚)4,500円 メンバース:大人3,150円
※子ども券、親子セット券は、熊谷会館・彩の国さいたま芸術劇場・埼玉会館にお申込みください。
※3歳未満のお子さんの入場はご遠慮ください。

児玉 桃 メシアン・プロジェクト2008

(第1回)レクチャー&コンサート「メシアンの世界への誘い」
詳細はP.19にて

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.6 アンドレイ・コロベニコフ

日時= 9月27日(土) 開演14:00 会場= 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
曲目= ムソルグスキー:組曲《展覧会の絵》
シューベルト:ピアノ・ソナタ第21番 変ロ長調 D960
料金= 一般:S席3,500円/A席2,500円/学生A席1,000円 メンバース:S席3,150円
※4回セット券 (Vol.5～Vol.8) S席12,000円/A席8,500円

公演詳細は、財団ホームページ

http://www.saf.or.jp/にて

Concert Review 公演レビュー

児玉 桃 ピアノ・リサイタル
～メシアン生誕100年を記念して～

メシアン没後10年の2002年に行った《幼児イエスに注ぐ20のまなざし》全曲演奏会の記憶もまだ新しい児玉桃が、メシアン夫人から託されたメシアンの未発表曲を日本初演した。

文= 片桐卓也(音楽ライター)

カラヤンもそうだが、今年2008年はフランスの作曲家メシアンの生誕100周年。《トゥランガリラ交響曲》など大作で知られるメシアンだが、夫人で名ピアニストであるイヴォヌヌ・ロリオとの出会いにより、数多くのピアノ曲の傑作を残していることも、皆さんご存知の通り。児玉桃の今回のリサイタルは、そのメシアンを含むフランス音楽を集めたもので、非常に知的に構成されたプログラムがいかに児玉らしい個性を示していた。冒頭にはメシアンの《鳥のカタログ》から《クロサバクヒタキ》。続いてドビュッシーを前半に集め、後半にはさらにラヴェルを中間において、前後をメシアンで包むという構成は、明らかにシンメトリーを意識していた。ドビュッシーの《版画》(全3曲)とラヴェルの《夜のカスパーレ》(全3曲)が前後半で呼応して、それぞれの作曲家の個性の違いを際立たせるという配置は、なかなか発想できないものだ。

しかし、なによりも耳を驚かせたのは、メシアンの作品群である。ダイナミックに弾き始められた《クロサバクヒタキ》。そして日本初演となる《ヴァイオリンとピアノのための幻想曲》は作曲家25歳の時の作品ながら、その独特の旋法的なメロディのアイディアをはじめとして、極めて強い個性を感じさせる作品で、なぜ2005年に児玉が初演するまで未発表だったのかと不思議なぐらゐ。戸田弥生のヴァイオリンも、エネルギーを発散して大胆に歌い上げるこの作品の要求に十分に答えていた(アンコールでも再び演奏された)。

メシアン作品を前にした時の児玉は、他の作曲家の作品よりも、さらに集中力を増しているように感じる。それは作品が要求することでもあるのだが、それに応えて、作品の複雑な色彩感やダイナミズムを作り出す児玉のピアノは、今秋のメシアン・プロジェクトへの期待を大きく高めるものだった。(2008年3月1日 音楽ホール)

9月より児玉 桃 メシアン・プロジェクト2008が始動
詳細はP.19にて



©加藤英弘

information インフォメーション

蛭川幸雄公開対談シリーズ
まなざし
NINAGAWA 千の目 第15回

【日時】7月19日(土) 開演 12:00(約1時間)
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール
【定員】150名(入場無料・要申込)

演出家 蛭川幸雄

×

劇作家・演出家

ケラリーノ・サンドロヴィッチ



ケラリーノ・サンドロヴィッチ
東京都出身。1982年、ニューウェーブ・バンド・有頂天を結成。並行して85年に劇団「健康」を旗揚げ、演劇活動を開始する。92年の解散後、翌93年に「ナイロン100℃」を始動。99年には「フローズン・ビーチ」で第43回岸田國士戯曲賞を受賞。以後、受賞多数。近年は映像分野でも活躍。近作にナイロン100℃公演「わが闇」、Bunkamura公演「どん底」、映画「グミ・チョコレート・パイン」など。

【ハガキ申し込み方法】
入場券の発送をもって抽選結果の発表にかえさせていただきます。
※メンバーズの方への優先権あり。

- 記入事項
①郵便番号・住所 ②氏名(フリガナ) ③年齢
④会員番号(財団メンバーズの方)
⑤希望人数(1枚のハガキで2名様まで)
- 応募締切 6月30日(月) 当日消印有効
- 応募先
〒338-8506 埼玉県さいたま市中央区上峰3-15-1
(財)埼玉県芸術文化振興財団「千の目」7/19入場募集係
- 問合せ先 メンバース事務局 tel.048-858-5507

ACCESS MAP



※駐車台数に限りがありますので、ご来場の際はなるべく公共交通機関をご利用ください。

サポーター会員 H20.4.15 現在

(株)与野フードセンター/(株)亀屋/武州ガス(株)
(株)エフテック/(株)松本商会/(有)香山壽夫建築研究所
埼玉新聞社/(株)テレビ埼玉ミュージック/金井大道具(株)
埼玉りそな銀行/(株)パシフィックアートセンター
アサヒ印刷(株)/FM NACK5/東京電力(株)埼玉支店
東京ガス(株)埼玉支店/埼玉県信用農業協同組合連合会
カヤバシステム マンナリー(株)/(株)タムロン/(株)オメダム
(株)十万石ふくさや/森平舞台機構(株)
日本データコム(株)/(株)ビルメン/東芝ライテック(株)
埼玉トヨタ自動車(株)/(有)齋賀設計工務
クレディ・アグリコル アセットマネジメント(株)
ソシエテジェネラルアセットマネジメント(株)
ゲレツツ・ジャパン・スズゼン(株)/(株)武蔵野銀行
浦和ロイヤルパインズホテル/(株)アルピーノ
国際照明(株)/(株)松永建設/(株)サイサン 会長 川本彦彦
三国 コカ・コーラ ボトリング(株)
あいおい損害保険(株)埼玉営業部/(株)ショーモン
埼玉スバル自動車(株)/(株)木下フレンド
(株)東玉/桶本興業(株)/(株)佐伯紙工所
(株)太陽商工/(株)しまむら/アイジャパン(株)
(株)ウム・ヴェルト・ジャパン/(有)六辻ゴルフセンター
(株)オリエント/不動開発(株)/(株)明成
ホッカイエムアイシー(株)/埼玉縣信用金庫
(有)武蔵興産/(株)栗原運輸/(株)エコ計画
彩の国SPグループ/(有)プラネッツ/(株)イヤホンガイド
トキタ種苗(株)/関東自動車(株)/日本ピストンリング(株)
(株)クマクラ/(株)デサン/亀井産業(株)
(株)グリーン企画社/(有)高信/(有)中島運輸
(株)国際ビジネス研究所/セントラル自動車技研(株)
(株)Liviko/(株)アズマン/太平洋セメント(株)
(株)ピー・アンド・イー・ディレクションズ
朝日新聞 仲光堂さいたま販売(株)/丸美屋食品工業(株)
マツヤハウジング(株)/日立キャピタル(株)
ポラスグループ/伊田テクノス(株)
(株)リゾン/ひがし歯科/埼玉建興(株)
(株)日産サテリオ埼玉/埼玉トヨペット(株)
(株)あいおい保険総合サービス/公認会計士 宮原敏夫事務所
(株)価値総合研究所/(株)埼玉交通/(株)アライヘルメット
西武文理大学/(株)東和銀行/医療法人 顕正会 蓮田病院
(株)協同商事コエドブルワリー/(株)ウイズネット
サイデン化学(株)/アイル・コーポレーション(株)
三光ソフラン(株)/市橋 秀夫/五光印刷(株)

「サポーター会員」入会のご案内

【入会による特典】劇場内サポーターボードへの会員名掲載・「埼玉アーツアター通信」やホームページへの会員名掲載・劇場内広報用パンフレットスタンドの利用・財団主催公演へのご招待 ほか
【年会費】1口10万円(有効期限は、入会月から1年間となります。)
【問合せ先】(財)埼玉県芸術文化振興財団 営業宣伝課
サポーター会員担当 TEL 048-858-5507

今年も美しい季節がやってきました。青い空、新緑、そして薄紅の桜。こんな日は外に出て散歩したくなりますよね。でも、僕はふと満開の桜の下で足をとめてしまいました。もう、満開が……。今年も開花からがあっというまです。もうそろそろ地球温暖化が原因でしょう。

そういえばこの冬、山形で30年ぶりのスキーにチャレンジして、樹氷を見た感動も忘れられません。霧が風に送られて、樹に衝突し、そこに凍りついて氷になったもの。この樹氷も年々減少しているそうです。美しい景色を見ているにもガガわらず、危機感を持たなければならぬなんて、こんな悲しいことはないですよ。

エコ先進国ドイツで暮らしているときや、東京だけでなく自然ゆたかな山形のオーケストラを指揮するときに感じることもあります。「自然の圧倒的な美に、人間はたまたまできない。アイドリング・ストップや節電、そんなことからいい。自然を守るために、誰もがちょっとした努力でできることを伝えるのは、僕の使命でもあるのではないかな。」人の前に立ち、言葉を発する指揮者としてできることは、直接ブログやコンサート前のトークのような形で語りかけること。そしてブルックナーやマーラーなどを聴いて、その音楽から感じることを「自然の声」、それを守ることに大切さをもっと身近に感じて欲しいですね……。

どうかこの桜が、100年後も1000年後も美しく咲いてくれますように！

Artist Diary

満開の桜に思うこと

4月3日 木曜日

文＝飯森範親

イラスト＝吉良麻実

